横須賀市長定例記者会見（2026 年３月 30 日）

９時 30 分～10 時 30 分
横須賀市役所３号館５階　正庁

１　浦賀駅前周辺地区活性化事業三者連携協定の締結について

市長
本日、住友重機械工業株式会社渡部社長、Team Perry’s の代表企業であるインデックス株式会社植村社長と浦賀駅前周辺地区の新たな街づくりに向けた第一歩として関係三者による連携協定を締結いたしました。ようやく、今日の日を迎えられることができ、本当に、本当に心から嬉しく思っております。
本事業は、令和３年３月に住友重機械工業様より、歴史的価値のある浦賀ドック周辺の土地をご寄附いただいたことを契機に始まりました。あらためて、いただいたご厚情に深く感謝申しあげます。また、人件費や工事費の高騰など、厳しい社会経済環境にある中で、浦賀の魅力と可能性を信じ、多くの時間と費用を投じて、本プロジェクトの企画提案をいただいた Team Perry’s の皆様、ここにおられる代表企業インデックス様に対しても心からの敬意と感謝を申しあげます。本当にありがとうございます。皆様の熱い想い、そして地域の皆様の強い期待に応えるため、私としては全身全霊をかけて１日も早い実現に向けて取り組んでいく覚悟です。今日を機に、皆様と共に、横須賀市の新しい未来を築いていきたいと思っています。
なお、昨年 10 月、優先交渉権者の選定結果の際に、事業概要を説明いたしましたが、一部、関係者との協議が整っておらず、事業全体像を説明することができませんでした。先般、その調整が整いましたので、この後、Team Perry’s の皆様から事業の全体像をご説明いただきたいと思います。私が考える「第二の開国」をまさに体現するプランとなっています。是非ご期待ください。
本日は誠にありがとうございます。私からは、以上です。

住友重機械工業株式会社 渡部代表取締役社長
お集まりの皆様、本日は誠にありがとうございます。ご紹介にあずかりました住友重機械工業株式会社代表取締役社長の渡部でございます。弊社浦賀工場は、2003 年の閉鎖から 22 年余りの歳月を経て、本日、開発に向けた大きな節目を迎えることができました。これまで長期にわたり、地域の皆様にご心配をおかけしてまいりましたが、今日この日を迎え、ようやく一歩前進できたものと感じております。
浦賀工場は、弊社の前身のひとつである浦賀重工業の発祥の地であり、日本の近代産業史においても重要な位置付けの場所です。その歴史ある地が、「第二の開国」というコンセプトのもと、新たな姿へと生まれ変わろうとしていることに、弊社としても大きな喜びを感じております。また、2021 年に横須賀市様へ寄贈させていただいたレンガドックにつきましても、今回の再開発によって、より一層、地域の皆様に開かれた場となることを、大変感慨深く受け止めております。
歴史あるこの地を未来へつなぎ、新しい価値を創出しようとされている横須賀市様ならびに Team Perry’s の皆様方の事業構想力と熱意に、心より敬意を表します。関係者の皆様のご尽力により、今後、浦賀の地、ひいては横須賀市全体が、さらなる発展を遂げていかれることを心から願っております。
弊社は、同じ横須賀市内の追浜に製造所を構えておりますが、横須賀市様ならびに地域の皆様から多大なるご協力を賜っておりますことに、あらためて心より御礼申しあげます。引き続き、横須賀市様ならびに地域の皆様のご理解とご支援をいただきながら、企業活動を通じて地域の発展にも微力ながら貢献していく所存です。簡単ではございますが、以上をもちまして、私からの挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

インデックス株式会社：植村代表取締役
インデックスの植村でございます。本日は、浦賀再開発プロジェクトに関する私ども Team

Perry’s の思いをお話しさせていただければと思います。今回のプロジェクトのコンセプトは、市長がまさにおっしゃったように「第二の開国」です。私たちはこの言葉に３つの意味を込めております。
まず１つは、マインドセットの転換期となる場所であるということです。ご承知のとおり、浦賀は黒船の来航以来、日本が世界に向き合うきっかけとなった場所です。その後、咸臨丸の出航、レンガドックの造船を経て、浦賀は自ら外に出ていく日本の精神を形作る場所といっても過言ではありません。まさに日本が世界とつながっていく、この転換期に浦賀はあったわけであります。今回のプロジェクトを通じまして、かつての日本のように外に向かって挑戦をする日本の新しいエントランスを作りたいという思いが私どもにはあります。
２つ目は、船から始まる街という浦賀の原点、これを未来につなげていくということにあります。スペインのガレオン船、ペリーの黒船、そしてレンガドックの造船、浦賀はいつの時代も船と共に歴史を刻んできたと言えます。今回、スペインの Ocean Capital Partners というグルーバルで活躍するスーパーヨットのマリーナを経営する会社と共に、マリーナの整備を行い、この土地の記憶を未来に継承する象徴にしたいと思っております。この街は船から始まった、その原点にある船の物語を次の時代につないでいきたいと考えております。
３つ目は、地域に開かれた場所を造るということです。浦賀は素晴らしい自然、海を持っています。かつてはレンガドックを中心に数多くの船を造って、送り出してきたという歴史があります。今回の再開発においては、この場所がさらに大きく開かれ、地域の皆様が海と直接つながる空間に生まれ変わらせるというコンセプトがあります。私たちは、これをまた、地域にとっての開国であり、すなわち世界と新しくつながりをつくるということを考えております。
これら浦賀の持つ歴史、そして未来をつなぎ、地域の方々に開かれ、そして世界に向かって広がっていくプロジェクト、それが私たち Team Perry’s が描く「第二の開国」の絵図であります。本日、お集まりの皆様、横須賀市の皆様、住友重機械工業の皆様、地域の皆様と共にこの新しい浦賀の物語を作っていくことができれば幸いだと考えています。本日はありがとうございます。

横須賀市 民官連携推進担当課長
お手元にお配りしております A4 横の資料をご覧ください。
２ページをご覧ください。これまでの経緯と、右側には事業対象地を示しております。
３ページをご覧ください。三者連携協定の概要ですが、（１）に締結者、(2)に協定の概要をお示ししております。その内容としましては、土地売買契約や提案事業の実施に向けた三者の義務、民有地売買の契約条件に関すること、市有地に関する事業協力者協定に関すること、規制緩和など必要な事前準備に関することを記載しております。
続いて、事業内容については、植村社長よりご説明いただきます。

インデックス株式会社：植村代表取締役
それでは、Team Perry’s の代表企業であるインデックスからプロジェクトの内容に関してご説明させていただきたいと思います。本日は、マスタープランを設計していただきました隈研吾さんにお越しいただいております。隈さんより今回のマスタープランのご説明をさせていただきたいと思います。隈さんよろしくお願いします。

建築家：隈研吾氏
（資料「隈研吾氏による全体マスタープラン」を説明）
マスタープランを担当しました隈でございます。よろしくお願いいたします。今回、市長からも「第二の開国」というお話がありました。「開国」ということは「つながる」ということです。今回の我々のマスタープランのテーマも「つながる」ことでございます。
まずひとつは、海と陸、これを新しくつなぎ直すということでございます。そのつなぎ直すひとつのカギとなっているのはストリートでございます。今、世界の街ではウォーカブルな街づくりが非常に重要なテーマとなっています。今回もウォーカブル、歩いて楽しい街にするということ、これが街のにぎわいをつくるということ、地域との連携をつくることになる、そのように考えておりまして、いくつかのストリートをこの中に提案しています。また、このストリートは歴史をつなぐ役

割を果たしています。1853 年のペリーの来航からドック、現代につながる３つの歴史をストリートがつないでいくことになります。それをレンガドックストリート、この赤い線ですけれども、そのように呼んでいます。その脇には県道 208 号、「浦賀みち」と我々は呼んでいるのですが、これが、既存の商店街とつなぐものとなります。開発が周りと切れてしまうのはよいことではありません。周りの商店街ともつながることが、この「浦賀みち」の大きな役割です。それによって市の浦賀ドックにも人が流れていきます。
さらに徳田屋パークです。これは江戸時代の徳田屋の歴史ともつながるということで、歴史がそこまで遡って、未来から江戸時代までつながる、そのような計画でございます。
真ん中にあります「グリーン・ツイン」と呼んでいる２つのツインタワーがございます。これは象徴的なゲートになります。非常にシンボリックなゲートで、駅から見たときに、全体の計画のモニュメントになるような構成です。その向こうにマリーナが広がっています。

（資料「民有地護岸を４つのゾーンに分化　マリーナエリア」を説明）
日本の代表的なマリーナ、世界レベルのマリーナがここにできます。ヨットゾーンとラグジュアリーゾーンが一緒になった世界レベルのマリーナが初めて日本に誕生します。

（資料「マリーナエリア/ ヨットゾーン」を説明）
マリーナの様子です。駅から見たときには、ツインのゲートが大きな門になって海につながります。また環境的な意味もあります。これはシミュレーションでは、風をやわらげる効果もあります。その先にヨットゾーンがあるという構成になっておりまして、環境という現代の大きなテーマに対してもひとつの答えになっていると言えます。

（資料「ゲートエリア」を説明）
これは駅から見たゲートです。ゲートの向こうに海が広がっています。非常にシンボリックな光景が生まれます。そこにレンガドックストリートがつながっており、人がレンガドックに自然に流れていきます。そのようなにぎわいの新しい拠点ができる。そのような構成です。
簡単ではありますが、以上がマスタープランでございます。ありがとうございました。

インデックス株式会社：植村代表取締役
それでは、続きまして本事業の核であり、日本初となる本格的なスーパーヨットマリーナについて説明いたします。
我々Team Perry’s のメンバーにスペインの Ocean Capital Partners という港湾業界で 50 年以上の実績を持ち、スーパーヨットマリーナの運営、投資、デザインを行う世界最大級の会社があります。Ocean Capital Partners が持つ、国際的な実績をベースにしながら、我々と一緒に日本初のスーパーヨットマリーナをしっかりと作り上げていきます。単にマリーナを造るだけではなく、スーパーヨットのマリーナにふさわしい住宅、ホテル、商業施設も整備していきます。
今回、来日できませんでしたが、Ocean Capital Partners のマネージング・ディレクターでありますアルマザン氏からビデオレターをいただいていますので、ご覧ください。

（ビデオレター放映）

続きまして、「第二の開国」におけるもうひとつの重要なテーマとして掲げているのが国際海洋交流拠点としての浦賀の位置付けです。2022 年に横須賀市の姉妹都市であるフランスのブレスト市で開催された、フランスのマクロン大統領が主導される One Ocean Summit（海洋環境国際会議）を浦賀に誘致をしたいと考えています。私どもとしては 2030 年頃に浦賀で開催することを目指しています。この海洋環境は浦賀が持つ大きなポテンシャルであると同時に、交流拠点を設けることによって、子どもたちが、海洋環境にもっともっと触れる機会を増やす、そして海洋環境におけるスタートアップ事業を展開できるような拠点も官民連携の組織・施設の中に作っていきたいと思っております。すでに One Ocean Summit については、協会から関心がある旨の表明をいただいております。先般、マネージング・ディレクターのアショク・アディセアム氏とオンライン会議を開催し、2030 年に向けた具体的な協議を詰めています。

さらに、世界に４カ所しかない大変貴重な文化資産、浦賀のレンガドックです。これを歴史的、教育的な観点から発信力を強化したいと考えています。スペインに古船復刻博物館（Albaola）という造船技術やそれらの継承・教育プログラムを展開しているところがあります。ここはユネスコのベスト・プラクティスの認証を受けました。この Albaola と連携をしながら、浦賀の造船の歴史を継承し、かつ、国内外に広く認知されることを目指していきたいと考えています。また、世界に４カ所あるレンガドックのひとつであるオランダの Fortresse Holland とも連携し、ノウハウを活用しながら、歴史の展示、ツアー、エンターテインメント、これらで盛り上げていきたいと考えています。
最後になりますが、「地域と歩む第二の開国」です。浦賀が持つ素晴らしい歴史、そして豊かな自然と世界最先端のスーパーヨットマリーナを融合することによって、新たな浦賀モデルを創出していきたい。そしてこの三浦半島をもっと活性化させていきたい。伝統と革新を持つ街へと浦賀を再構築していきたいと考えています。エンターテインメント、海洋教育、芸術、食文化。グローバルな展開の中で、多様な取り組みを通して新たなイノベーションを起こしていきたいと考えています。我々Team Perry’s は今後とも、横須賀市、浦賀の長期的な発展に沿うパートナーとしてこのプロジェクトを進めていきたいと考えています。地域の皆様と浦賀の歴史を継承し、それをさらに超える「第二の開国」を目指していきたいと考えております。ご支援のほど、よろしくお願いします。

■質疑応答

記者
「第二の開国」の実現に向けて、総予算はどのくらいになるでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
インフラの工事から始まり、商業施設、住宅、ホテルなどの建設を含めて、当初の事業費としては約 1,000 億円と考えています。ただ、昨今の建設物価の変動などございますので、数字は動く可能性があります。

記者
約 1,000 億円は、今、ご説明いただいた全ての事業を合わせてということでよろしいでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
そのとおりです。

記者
今回のデザインの監修は隈研吾さんとのことでした。前回の記者会見で、概要として簡単なイメージを発表されていたかと思いますが、どこから監修されていたか教えてください。

建築家：隈研吾氏
一番最初のときから、コンペのときからずっと、皆様と一緒にやっておりました。

記者
隈研吾さんに質問です。今回、デザインを監修されて、隈研吾さんのデザインの特色があると思います。そういったところはどういったところに生かされているか教えてください。

建築家：隈研吾氏
ひとつは、環境に優しい建築を造りたいと思っておりまして、今回のところは理想的な立地だと、場所を見たとたんに感銘を受けました。海と山とが自然につながって、しかもそれにインフラ、鉄道がそのままつながっている。これからの未来における、環境のモデル的なプロジェクトになる場所だなと思いました。それから、歴史とつなぐということが、これからの建築や都市づくりで非常

に重要なことです。歴史と未来をつなぐことができるというこの場所、それこそ1853年の黒船来航からドックの建設、そういう日本の歴史の一番重要なものがここに残っていて、それを未来につなげるということは、たいへんにやりがいのある、意味のあるプロジェクトだと感じました。

記者
このプロジェクトを引き受けた理由を教えてください。

建築家：隈研吾氏
今、お話ししたような理由で、こんなにすごいプロジェクトはないな、と最初に現地に来たときに感じました。

記者
去年の10月に発表されたときは、Team Perry’sはインデックスさんを含めて17社ということだったと思います。今回、資料を拝見すると6社となっていますが、インデックスさんを含めて6社ということで良いでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
17社がそれぞれ関係しているというのは、今も同様です。さらにそれが増え続けています。今回、協定に名前を載せた6社は、私ども Team Perry’sは合同会社で横須賀中央駅前に事務所がありますが、そこに資本参加をしている会社と、インフラ整備が終了した段階でホテル、住宅、商業施設などに投資をされる会社です。

記者
そうしますと、協定を結んだのは6社ということでよいでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
そのとおりです。

記者
去年の10月の記者会見では、16階建てのホテルが80室、マンション150戸とのことでした。この辺は変更なしでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
変更ありません。

記者
着工の時期について、令和9年から10年とありますが、もう少し詳しく、春・夏・秋・冬などと時期を出すことはできませんでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
着工のタイミングですが、まだ、いくつか変動要素があります。土地計画上のこの土地の用途変更などです。年はお示しいたしましたが、より詳しい時期に関しては、今後、詰めてまいります。
もう少し具体的なスケジュールは6月くらいに出せると思います。

記者
この令和9年から10年というのは、年度ではなく年、つまり令和10年12月までに着工ということでよろしいでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
はい。

記者
予算についてですが、当初のとおり、市の負担は30～40億円ということでよろしいでしょうか。

横須賀市 民官連携推進担当課長
整備費と20年間の運営費を含めて、30～40億円を想定しております。

記者
Team Perry’sの名前に込めた思いを教えてください。

インデックス株式会社：植村代表取締役
名前のとおりです。私たちは「第二の開国」を掲げています。ペリーの来航は日本を変え、新たな日本の船出という歴史をつくりました。その経緯から、今回の浦賀のプロジェクトが、まさにペリーと同じ思いで、浦賀の地の「第二の開国」を目指すと同時に、浦賀のみならず三浦半島に、もっともっと人に来ていただいて活性化する、そういった場にしたいという思いを込めて Team Perry’sという名前を付けました。

記者
「太平の眠りをさまず上喜撰たった四盃で夜も眠れず」という歌があります。ペリーが初来航したとき、とてつもなく怖い、天狗のような似顔絵が流布されました。ペリーは初めて来たとき恐れられましたし、そのような歌も詠まれました。そのような中で、地域にどのように柔らかく入っていくのでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
私どもは、地方創生という部分に関しては、いろいろと経験をさせていただいております。地域との連携は大変重要だと感じています。地域の方々、海のことですので漁協の方々含め、連携、関係性をずっと維持していきます。建物ができて、この開発が終わった後も長期にわたって運営をしていきます。そういった意味では、地域の方々との連携は非常に重要だと思っています。スーパーヨットマリーナや、いろいろな新しい施設をつくるというお話をしておりますし、海洋環境のお話もしておりますが、こういった新しいものは歴史の上に成り立っています。住友重機械工業さんがずっと守り続けてきた日本初の造船所のレガシー、周辺地域の方が浦賀ドックと一緒にずっと歩んできた道、浦賀が持つこのエリアの歴史、これらは本当に大事なものであり、このベースに基づいて新しいもの、イノベーションが生まれます。外国の方は、特にこういったものを大事にしていると痛感しています。そういう意味では、地域の方々との連携は本当に大事にしていきたいと思っています。

記者
住友重機械工業さんにお伺いします。工場閉鎖から20数年。眠りから覚めます。当初、この計画をご覧になられたときの率直な感想を教えてください。

住友重機械工業株式会社 渡部代表取締役社長
住友重機械工業としては、2003年に工場を閉鎖した段階で、浦賀での造船自体は幕を閉じたということではあるのですが、会社の創業のひとつでもありますし、100年強、そこで事業を行っておりましたので、あの工場跡をどう活用するか、もしくは地域の皆様にどう活用していただくかということは課題と言いますか、気がかりな点でありました。先ほどコンセプトの説明でもありましたが、歴史をつなぐというコンセプトで地域の活性化に生かしていただくということは、長く工場をほとんど使わずに遊休化していた責任と言いますか、皆様にいろいろとご心配をおかけしていたことからすると、ようやく良い開発のプランがまとまったと感慨深く思っているところです。

記者
市長にお伺いします。ペリーの開国からのお話でしたが、浦賀は、遡ると北条の水軍拠点から始まって、1700年くらいに浦賀奉行所ができて、というところだと思います。このプランを見ると浦賀

奉行所が見えないのですが、どのようにお考えでしょうか。

市長
様々な仕掛けづくりをしていく中で、歴史の検証は、市有地、横須賀市が持っている土地にいろいろこれから計画を立てたいと思っています。当然のことながら、そこは、浦賀の人たちに開放して、地域の中心にならなければならないと思っています。

記者
期待してもよろしいでしょうか。

市長
期待してください。

記者
植村さんにお聞きします。マリーナについてです。三浦半島には逗子マリーナ、葉山マリーナなどがあり、競合するところがあると思います。先ほど Ocean Capital Partners さんのビデオメッセージには、「スーパーヨットのハブとして」という言葉がありました。他の隣接するマリーナと違う特徴をもう一度、ご説明いただけますか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
先ほど、日本初というお話をしました。スーパーヨットと呼ばれるボートは、世界で約 8,000 隻あると言われています。年々、アジアを中心に数が増えているという現実があります。しかし、残念ながら日本には、こういったスーパーヨットが来航できる場所が、なかなかありませんでした。スーパーヨットが来航するためには何が必要かというと、当然大きいボートが来ますので、インフラ設備、電力もそうですが、特殊な設備が必要になってきます。また、富裕層がいらっしゃいますので、そのような方が滞在できるようなホテルや食事をするような場所が必要です。それだけではありませんが、スーパーヨットが来航できる日本の玄関口にすることが今回のプロジェクトの目的ではありますし、他のマリーナの差別化というところではあります。我々としては東京に非常に近い、東京湾にも出やすい立地のマリーナをベースにしながら、三浦半島全体の隣接する既存のマリーナともうまく連携を取りながら、お互い共存共栄して、三浦半島の海のスポーツを世界に発信できる場所にしていきたいと考えています。競争ではなく、協調しながら進めていきたいと思っております。

記者
隈さんにお聞きします。隈さんの 15 年間の歩みをまとめた「粒子のダンス」を拝見しました。世界各国でその地の歴史に合わせた建物をというコンセプトで、お造りになられている様子がドキュメンタリーでまとめてありました。この浦賀のデザインの中で、これが一番隈研吾らしいデザインだというものはどれでしょうか。

建築家：隈研吾氏
湾全体で、いい意味で、今まで全く可能性を生かしてこなかった、こんないい地形が、こんなに海と陸がいい感じで残っていて、しかもそこには歴史まで絡んでいます。我々は、世界各地を見てきましたが、この場所は世界のどんな場所にも負けないと感じました。そのような場所で、環境と歴史をテーマにして、このようなプロジェクトができるということは、大きな可能性、本当に日本を代表するプロジェクトになると感じました。さらにそこに世界的なノウハウが入ってくるということで、本当の意味での「第二の開国」につながるようなプロジェクトだなと感じました。

記者
市長にお聞きします。１点は歴史関連です。浦賀の歴史は、ペリー以前の歴史もありますし、まだまだ解明されていないことがたくさんあると思います。ガレオン船などは三浦按針が外交顧問を務めて誘致していたと思いますが、まだ、浦賀ではそういった歴史の跡が見つかっていません。それ

以前の里見氏との争いの頃の浦賀城は残っているのですが、浦賀城の近くにもうひとつ城跡がありそうだとの話もあります。そのあたりも全く専門家の手がついていないところだと思います。そのような歴史的な検証は、具体的にはどのようなことをされるのでしょうか。

市長
当然のことながら、そこはやっていかなくてはならないと思っています。本来の横須賀のアイデンティティを作り直さなくてはならないと思っています。もののふの始まりは横須賀だと、三浦一族だと、先日もお話ししました。実はそこから始まっていて、あそこに水軍があって、お城があって、という物語から始めなければいけないと思っています。古船の博物館も含めて、その歴史検証の中に、おそらくその歴史も全て含めていかなければならないと思っています。浦賀奉行所は作らなくてはならないと思っていますが、その中で、歴史的な検証も全てやっていきたい。そして新しい道を作っていきたいと思っています。今までそういった調査は行われていませんでした。これはもちろん、住友重機械工業さんの土地であったからなど、様々な要因があったのですが、これを機に様々な歴史を掘り起こしながら歴史を紡いでいきたいと思っています。これは理想なのですが、具体的には復刻版というよりも、市有地に浦賀の奉行所を作って、その中で様々な検証が行われ、それが浦賀ロードにつながっていけば、ということが私の考えなのですが、今後、いろいろとお話をさせていただければと思っています。

記者
２点目はレンガドックについてです。資料にオランダとスペインのことが書いてあります。多分、このような展示方法になるのではないかと、写真から見て分かるのですが、活用方法を聞かせてください。それとお隣のヨットハーバーに浦賀ドックと同じような乾ドックがまだ手つかずのまま残っていると思いますが、そこの活用方法なども今回、含まれるのでしょうか。

市長
これから相談をさせていただきながら、全体構成を作っていく中で、どんなことが連携できるかと考えていかなければならないと思います。レンガドックに関しては様々な活用方法が考えられます。歴史的な検証も含めて、エンタメにも使えるなど、様々なお話をさせていただいたので、いろいろな使い勝手があると思います。それはこれからです。

記者
スーパーヨットの定義についてもう少し教えてください。資料８ページにメガヨット（60m 級）と記載があります。具体的に普通のヨットと何が違うのか教えてください。

インデックス株式会社：植村代表取締役
基本的にはボートを指します。諸説あるのですが、概ね 20m 以上の長さのボートをスーパーヨットと位置付けています。大きいものでは 100m を超えるものもあります。Ocean Capital Partners がグローバルでスーパーヨットの運営をしておりますので、この日本、浦賀のマリーナに対する興味を持っているところと話し合いを始めるところです。この数字というのは、今、話し合いを基に想定している数字ですので、今後変わってくることもあると思います。

記者
スーパーヨットマリーナとありますが、基本的にはヨットマリーナということでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
そうです。大きいボートを停めることができるマリーナと考えていただければと思います。

記者
日本にスーパーヨットマリーナがなかった理由というのは、単純にそういう条件を満たすマリーナがなかったということでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
国土交通省が、コロナ前に、日本にクルーズ船をもっともっと持ってこようと、いろいろな既存の港に補助や規制緩和を行って進めてきたという経緯があると聞いています。その中で同時に、海外の観光客に来てもらおうという政策の中で、海を使った観光客誘致を進めていこうということで、クルーズ船と同様に、海外でかなり所有者が増えているスーパーヨット誘致に関しても動き出したと聞いています。しかし、コロナでいったん立ち消えてしまいました。今後、クルーズ船も含めて、海外の富裕層の方が船で日本に来ることができる寄港地が必要ではないかと国土交通省も考えていると伺っていますので、そういった中で、私どもはいち早くこの地に大型ボートが寄港できる場所をつくろうということでコンセプトを固めました。

記者
日本初のスーパーヨットマリーナとのことでしたが、2027 年に神戸でもスーパーヨットが停泊できるマリーナを整備するとのことです。こちらとの違いは、どのような点でしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
全貌を把握しているわけではありませんが、神戸のマリーナに関しては、期限が限られていると聞いています。世界中にスーパーヨットが寄港するマリーナがありますが、そういったところが持っている設備、ホテル、商業施設などが完備されていないと思います。海外のスーパーヨットマリーナは、単にマリーナがあるだけではありません。それに付随する必要な施設、サービスもしっかりと備えています。海外のグローバルのレベル、あるいはそれ以上のものをつくることが Ocean Capital Partners の考えです。これが日本のスーパーヨットマリーナの火付け役になるのではないかと考えています。

記者
資料にメガヨット７隻、スーパーヨット４隻とありますが、規模的には、大体何 m 級までが停泊できるマリーナになるのでしょうか。

インデックス株式会社：植村代表取締役
外からくる大型のボートについては、護岸が 500m くらいありますので、護岸を中心に一時的に停泊できるようにしたいと考えています。イメージとしては、大型ボートとしては 60m くらい、あるいはそれ以上の船が来るのではないかと考えています。

記者
市長にお伺いします。スーパーヨットを含め富裕層の受け入れを拡大するにあたって、植村社長からもお話がありましたが、浦賀だけではなく三浦半島全体、グレーター東京という意味で、第２アクアラインのような構想もありますけど、海を通じて千葉との距離も考えると、近隣との観光での連携をますます図っていかなくてはならないと思いますが、そのあたりの構想はいかがでしょう。

市長
先だって、４市１町の会議があり、この構想をお話ししまして、是非連携していきたいという話になりました。道路事情によって、ここからバスを出してもいいという連携をしようという話が決まりました。千葉ともそういう話になってくると思いますし、ヘリポートのこともあります。流れができてくると思います。「第二の開国」ですから、ここから新しい流れを作っていくためには、他都市と連携していかなくてはならないと思っています。

記者
市長にお伺いします。富裕層を迎え入れると再三お話がありました。ここが素晴らしければ素晴らしいほど、経済的にもここで囲われてしまって、外にいる人が置いてけぼりになってしまうのではないかという気がします。その辺はどのように考えていますか。

市長

地域との連携をこれから図っていかなくてはならないし、商店街の方にもご説明させていただいております。融合していくことが必要だと思っています。これから少しずつその話をさせていただきたいと思っています。「たった四盃で夜も眠れず」なのですが、六盃飲んでも夜眠れる地域にしなくてはならないと思っています。うまく融合させていかなくてはと思っています。
それからもう１点、国際平和会議を開きたいと考えています。この混迷を深める世界で、基地があるところで、パラドクスなのですが、やはり平和というコンセプトが絶対に横須賀には、三浦半島には必要です。今までどちらかというと、半島でどん詰まりだったのですが、そこから、また風が通って新しい時代に向けて、歴史と共に、隈さんがおっしゃったように流れができて、そして平和という概念がここから生まれてくればと思っています。思いがいっぱいで、やっとここまできたなと思いがあります。絶対うまく生かせなければならないので、そのコンセプトも含めて地域の皆様にはお話をしなくてはならないと思っています。

記者
その平和会議というのは、One Ocean Summit とは別のものでしょうか。

市長
One Ocean Summit になるのか、それ以外のものになるのか。いずれにしても、やはりそういうレベルのものを、是非お願いしたいと思っています。海はつながっています。これだけ無秩序の世界になっている今だからこそ、何かひとつここで集約して、皆様に来ていただいて、ここで平和を語ってもいいのではないか、そういうことも必要ではないか。それが「第二の開国」だと思っています。

インデックス株式会社：植村代表取締役
One Ocean Summit はフランスのマクロン大統領が中心に展開しているというお話をしましたが、ネットで見ていただければお分かりになるかと思いますが、アメリカの関係者も参画しています。グローバルな世界で海洋環境を考えようというサミットです。先ほど市長がおっしゃったように、おそらく今後の展開としては、この One Ocean Summit も、今の原状、世界情勢を考えて、より平和などをしっかりと考えていこうという方向性になると思います。我々としても横須賀市のご協力を得ながら、是非進めていきたいと考えています。

記者
浦賀は、いま、品川からですと京急でしかアクセスできません。京急も朝は特急が少しありますが、各駅停車しかありません。浦賀の街づくりを進めていく上で、交通アクセスは、京浜急行電鉄さんなしには語れないと思うのですが、その辺はどのようにお考えでしょうか。

市長
当然、ご協力いただかなければいけないと思っています。この間も川俣社長と連携していこうという話になりました。会長の原田会長は同級生です。これにものすごく期待をしている、浦賀から新しい流れができるという思いを持っていただいています。三浦半島の連携も含めて、一緒に交通網をどうしようかという話をしている最中です。これからに期待していただければと思います。

■案件外質疑応答

記者
イランとアメリカの戦闘が長引いています。横須賀からも駆逐艦が出ているようです。市長は常々、米兵も横須賀市民だとおっしゃられています。横須賀市民が戦いの場にいるということで、米軍からの市へ何か情報提供はありますか。

市長
特別に情報提供はありません。運用に関する問題なので、私たちに対しては情報提供がないのだと思います。非常に大変な状況にはあると思いますが、立場としてはお答えをさせていただく立場に

ないと思っています。

記者
いまの質問の関連で、この情勢において、原油価格が高騰しています。先日、政府から備蓄の開放がありました。全国の自治体を見ていると、例えば路線バスの燃料調達の不調などが起きており、いろいろなところで影響が出ています。横須賀市では何かこのような影響が出ていますか。

市長
今のところ大きな影響があるとの報告はありません。ただ、当然のことながら、今後の推移を見守りながら、やっていかなくてはならないと思っています。現在は国の推移を見守っていきたいと思います。

記者
基地の前で抗議をする方が増えてきて、米兵の方もピースサインや、目に涙を浮かべるなどの反応もあります。市民感情への市長のメッセージなど、一言いただけないでしょうか。また、議会でイランへの決議があったと思います。それに対する所感をお願いします。

市長
政府が国際法上の評価は困難と言っている中で、一自治体の首長としての評価、発言は控えさせていただきたいと思います。市民感情としては分かります。ただ、平和に対する問題で、国家の問題と基地の問題は分けるべきだと思います。できる限り早くこの混乱を収集して、米軍の方たちも早く帰還することを期待していますが、それ以外のことの発言は控えさせていただきたいと思います。

以上